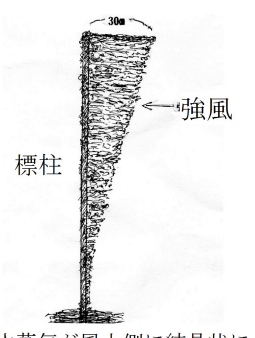


NO. 38 (通算38)

絵・文・題字 渋谷 一夫



霧や水蒸気が風上側に結晶状に凍り付く

「見」と「観」

下山後、藤村郁雄所長と雑談した。所長を35年も勤める大ベテランだ。「山頂は風が強かっただろう、笠雲がかかっていたよ」。雲を見ただけでその様子が分かるのだ。

富士山の謎 (8) 帽子を被った富士

58年前の昭和35年10月10日前後の数日間、私は富士山頂にいた。厳冬の測候所の仕事を取材するためだった。10月とは言え、山頂は既に真冬、人っ子一人いなかった。いるのは測候所員6名と私たち取材班3名の計9名だけだった。今回は、その山頂の厳冬の様子を紹介したい。

冬でも所員は6名。それも20日交替だ。食料や資材の一部は、真冬でも荷揚げする。氷雪がカチカチに凍り、強風が吹き荒れても行うのだ。その作業は、専門の運搬人「強力」(ごうりき)が行うが、真冬は非常に危険な作業なのだ。天気急変もある。高度差もある。だから、休憩・宿泊施設が必要で測候所には山小屋が3カ所ある。

山頂に笠雲かかる

富士山に笠雲がかかると一つの画になる。だが気象学上は、非常に厳しい現象になるのだ。笠雲はレンズ雲の一種で、非常に風が強い。雲が、山を乗り越えようと競り上がってきて、山頂に居座つてしまふのだ。それが笠雲だ。帽子を被ったように見え美しい。だが、その裏には強い風雨が隠れているのだ。

早速、観測機器のある最高点に上がってみた。物凄い風だ。鉄格子で囲ってあるが、吹き飛ばされそう。風速は数10mある。翌朝10分間の平均風速は36mだった。

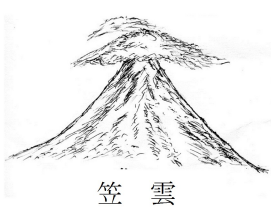
気温も零下20℃近い。霧や水蒸気が物に触れると、アツという間に凍り付いてしまふ。これで、「観測機器は大丈夫なのかな」と心配になり、聞いてみた。時々、計器が凍り付くことがあり、ハンマーで叩き落とすのだという。その場面を撮影しようとしてシャッターをおした。作動しない。凍ってしまったのだ。それほど寒いのだ。

ついでにこんな話も。見と観は同じ「見る」だが意味は違うんだ…と。「見」は、笠雲は美しいな…で終わってしまふ。「観」はもつと奥深く見ることなんだ。笠雲の中は強風だな荒れてるな…など、その裏まで読み取ることなんだ…と。気象学者らしい見方だなと感心した。

所員6名で観測

ある御殿場口から登った。途中、観測所の山小屋で1泊し、翌日山頂を目指した。もう山小屋は、全部閉鎖されていた。

翌日の天気は快適。だが、山頂に着く頃から雲行きが怪しくなった。風が強くなり、山頂に雲がかかってきたのだ。



笠雲



夏でも消えない富士山火口の雪